

「トーク・チョーク・ワーク」何のことだかおわかりだろうか。「トーク」は授業での教師の話である。一斉形態の講義型の授業のことである。「チョーク」はもちろん黒板に書くための道具である。「ワーク」は授業中に使うワークシートのことである。

「トーク・チョーク・ワーク」とは、よくない授業を揶揄した言葉なのである。一方的な教師の話を中心に、教科書と板書とワークシートだけで進めていく授業のことである。さすがに小学校ではほとんど見られない授業だと思う。

では、中学校はどうであろうか。「言語活動の充実」「アクティブラーニング」「主体的・対話的で深い学び」などの言葉は流布、浸透してきた。しかし、展開される授業の実態はというと、まだまだ講義型の授業が多いと思うのだが、いかがであろう。

高等学校ではどうであろうか。「アクティブラーニング」はかなり意識されてきてはいる。だが、まだまだ「トーク・チョーク」あるいは「トーク・チョーク・ワーク」中心の授業が多いのではなかろうか。

学びは、「聞く」だけでは10%しか身につかないというデータがある。

『聞く』は10%」学校の授業に代表される「講義」というスタイルは、「聞く」ことが中心である。しかし、「聞く」だけでは、記憶の定着率は10%だそうである。

『見る』は15%」資料や黒板の板書など、資格情報のほうが「聞く」だけよりも定着率が増加するそうである。それでもまだ15%である。

『聞く』と『見る』は20%」「聞く」と「見る」を組み合わせると、定着率は20%に上昇する。それでもまだ5分の1である。

『話し合う』は40%」友達や教師と話し合うと40%になる。授業に話し合いを取り入れるのもうなずける。

『体験する』は80%」学びに関することを実際に体験すると80%が記憶として定着するそうである。「失敗から学ぶ」というのも体験から学びを得ていることだと思う。

『教える』は90%」学びは人に教えると、記憶への定着率が90%にもなるそうである。進学率の高い学校は、生徒同士が教え合っている雰囲気があるそうである。「教える」ことで自分も学んでいるということなのであろうか。また、「教える」と同じように、自分で「見つける（発見する）」ことも90%程度の定着率があるそうである。

約2500年前に「老子」は、「聞いたことは忘れる、見たことは覚える、やったことはわかる」と言っている。生徒からすると、1日6時間も講義を聞かされたら、たまったものではない。体育や音楽、美術、技術・家庭がなかったら、もう地獄である。

このようなデータは、「なぜアクティブラーニングなのか」についての説明にも使える。では、「聞く」だけではだめだとわかっていながら、どうして「トーク・チョーク」あるいは「トーク・チョーク・ワーク」になってしまうのであろうか。たぶんそれは、教師は話していたほうが安心だからである。話せば教えたつもりになれる。自分のペースで授業を進めることができる。

「あれもこれも話した。授業で扱った」という安心感を得ることができる。したがって、話せば話すほど定着しなくなるという悪循環に陥っていく。「あれほど話したのに、あれほど教えたのに」と、できないことを児童生徒のせいにしてしまいがちである。

一方、「見る」には資料等を準備しなくてはならない。「話し合う」ためには場の設定等が必要となる。「体験する」ためには相当な準備が必要になる。「教える」と「見つける」ための授業にするには、より高度なものを求められる。どれも大変である。そのことに要する時間の計算もむずかしい。大変なことはなるべくやりたくないし、続かないのである。忙しすぎて準備が追いつかないという現実もある。このような授業を教師主体の授業という。

(次号に続く)